

10月26日(日) サムエル記第一5章1～5節

「次の日、朝早く彼らが起きて見ると、やはり、ダゴンは主の箱の前に、地にうつぶせになって倒れていた。ダゴンの頭と両手は切り離されて敷居のところであり、胴体だけがそこに残っていた。」(4節)

5章1節は、4章11節からの続きと考えることができ、イスラエルからペリシテへと話しの主体が変わります。戦いに勝利したペリシテ人は、当時の慣習として、神の箱を奪い、戦いが行われていたエベン・エゼルからパレスチナの南部で当時ペリシテの中心地であったアシュドテまで運んできました。2節でペリシテ人たちは神の箱をアシュドテのダゴンの神殿に運び込みます。「ダゴンの傍らに置いた」というのは、ダゴンの神がイスラエルの神に勝利し、イスラエルの神がダゴンの神の力と権威に服したことを意味しています。ところが、3節ではアシュドテの人たちがダゴンが主の箱の前に、地にうつぶせになっているのを発見します。これは、ダゴン神が主の御前にあって地にひれ伏すべきであることを象徴的に示しています。人々はダゴンを取り、元の場所に戻しますが、再び地にうつぶせになって倒れていただけではなく、「ダゴンの頭と両手は切り離されて敷居のところであり、胴体だけがそこに残っていた。」状態となっていました。頭と両手が切り離されるというのは、当時は戦争に敗れたことを意味していたので、このことは主なる神がダゴン神に完全に勝利したことを意味しています。つまり、イスラエルは、罪のゆえにペリシテに敗れましたが、それが、すなわち主なる神の敗北を意味していたことにはならないということです。ここで、主である神は、自らご自身が誰であることを異邦人であるペリシテの人たちに対しても現し、その力と権威をお示しになりました。主なる神は、すべての人が恐れるべきお方であり、ひれ伏して拝するべきお方です。それとともに、主が私たちを通しておとしめられていることはないでしょうか。むしろ私たちの姿が証しとなって、主があがめられているでしょうか。

10月27日(月) サムエル記第一5章6, 7節

「主の手はアシュドテの人たちの上に重くのみかかり、アシュドテとその地域の人たちを腫物で打って脅かした。」(6節)

主の手は、旧約聖書の他のところにも出てまいります。出エジプト記9章3節には「見よ、主の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に重い疫病が起る」

とあるように、主は、ご自身の御手をもってわざわいを下されました。今日の箇所「主の手はアシュドテの人たちの上に重くのしかかり」とは、主は御手のわざをもってアシュドテの人たちにご自身の栄光を現された、ご自身が誰であるかを明らかにされたことを意味しています。ですから、7節を見ますと、「イスラエルの神の箱は、われわれのもとにとどまってはならない」と言い、自分たちが腫物で打たれたことは、主の手のわざによることを認めざるを得なかったのです。主は、今も変ることなく、その御手をもってみわざをなしておられます。私たちは主の御手のわざをなかなか認識することはできないかもしれませんが、主は確かにその手をもって働いておられることを信じましょう。その中であって、私たちは祈りによって主が御手を動かしてくださることを祈り願うべきです。私たちはなぜ主が御手を動かしてくださることを願うのかと言いますと、ただ単に、自分や教会にとって益になることを主がなしてくださるようにと祈ることではありません。むしろ主がその御手をもってみわざをなしてくださることにより、ご自身の栄光を現してくださるためであり、それは主がなしてくださるみわざにより、クリスチャンもクリスチャンでない方々も、すべての人が主を認めることにより、主なる神だけがほめたたえられることを願うということです。主が私たちのために御手を動かしてくださるのは、わざわいではなく、祝福を通してご自身の栄光を現されるためです。そのことを信じて、御手のわざを祈り求めましょう。

10月28日（火）サムエル記第一5章8～12節

「死ななかった者は腫物で打たれ、助けを求める町の叫び声は天にまで上った。」（12節）

ペリシテ人の領主たちは相談して、神の箱を海岸沿いのアシュドテからより内陸にあるガザに移しました。そうすれば、腫物の問題も解決するのではないかと思ったのかもしれませんが。ところが、今度はガテでもすべての人が打たれ、腫物ができました。そのことが「主の手はこの町に下り、非常に大きな恐慌を引き起こし」というかたちで表現されています。今度は、神の箱がエクロンに移されましたが、最後的には元の場所に戻っていただくということになりました。

津村俊夫先生がご自分の注解書の中で、ここを神の勝利の行進と呼んでおられます。それは主の臨在の証しである神の箱が移された場所で、主は御手をもって人々を打たれたからです。つまり、戦いに敗れたのはイスラエルであって、主ご自身ではないことをここでも明らかにされているということです。それと同時に、主の御手がさばきというかたちで現れるなら、必ず

人々には非常に大きな恐慌が引き起こされ、町中に死の恐慌があります。すなわち、主のさばきは耐えられないような激しい恐れを人々に引き起こすということです。罪人が主の御前に出るということは、激しい恐れを引き起こし、とても主の御前には誰一人として出ることができません。そして私たちは本来罪のゆえに主の御前に出ることができない者たちでありましたが、しかし、私たちは罪を赦されたことで、恐れではなく、感謝と喜びを主に対して持つ者とされ、恐れることなく主の御前に出ることができる者とされています。そのことを今日も主に対して心から感謝をささげましょう。

10月29日(水) サムエル記第一6章1, 2節

「主の箱をどうしたらよいでしょうか。どのようにして、それを元の場所に送り返せるか、教えてください。」(2節)

1節に「主の箱は七か月間ペリシテ人の地にあった。」とありますが、これはエベン・エゼルからアシュドテに運ばれて来てから、(5:1)この時までで七か月が経過したということです。それと同時に、七はイスラエルにおいては完全数であることから、ペリシテ人が災いのために受けている苦しみが、頂点に達したとも言えます。興味深いことに、5章1, 2節では「神の箱」と言われていて、3節のナレーションでは「主の箱」と言われていますが、7~11節の人々の会話の中では「イスラエルの神の箱」と呼ばれているのに、6章2節では急にペリシテ人たちが「主の箱」と呼んでいます。これは、ただ単に呼び名を変えたということではなく、主がペリシテ人の地でなされた災いを通して、ペリシテ人たちが主の力を認識し、恐れを感じたのでしょう。そして、人々は主の箱をイスラエルへ送り返すことを願います。主の箱は、ペリシテがイスラエルに勝利をしたことの証しですから、本来イスラエルに送り返すという事はあり得ないことでした。しかしペリシテはイスラエルに勝利しましたが、主なる神には敗北したことを認めざるを得ず、やむなく主の箱を送り返すことにしたということです。

ペリシテ人たちは、主の箱の扱いをどうしていいのかわからず当惑していました。それと同様に主を知らない人たちは、神の存在を認めつつも、自分たちがどのようにして神を求めればいいのか分からず当惑せざるを得ません。そのような時に主を知る私たちが、人々を主のみもとへと導くことができるように祈りましょう。また主の働きにより、罪の中にあつて主を見出し、悔い改める者が起こされるように祈ってまいりましょう。

10月30日(木) サムエル記第一6章3節

「イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。神に対して償いをしなければなりません。そうすれば、あなたがたは癒されるでしょう。また、なぜ、神の手があなたがたから去らないかが分かるでしょう。」

2節で「主の箱をどうしたらよいでしょうか。どのようにして、それを元の場所に送り返せるか、教えてください。」と問うペリシテの人たちに、祭司たちと占い師たちは、「イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。神に対して償いをしなければなりません。」と答えます。「何もつけないで」とは、手ぶらでとか贈り物もなしということです。さらに「神に対して償いをしなければなりません。」と言われていて、このことについての解釈には議論がなされています。と申しますのは、ペリシテ人は戦いにおいてイスラエルに勝利をし、自分のところへ神の箱を持って来ただけであって、それが重大な過失となり得るのかと主張する人たちもいるからです。しかし、神の箱を持ち帰り、ダゴンの神殿にそれを安置したことについては、どのような思いでいたかには関係なく、ペリシテ人たちの罪は免れず、そこに神のさばきが下ったということです。私たちも、イエス様を救い主として信じる前には、まさに罪人であり、神を意識するとせざるにかかわらず、神の御前に罪に罪を重ねるような歩みをしていましたが、どのような罪であったとしても、すべての人に対して神のさばきが下るのであって、自らの言い訳によって神のさばきを免れることのできる人は誰もいません。「不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」(ローマ人への手紙1章18節)とあるとおりです。

私たちは神の怒りをなだめ、罪のさばきを免れる術を知らず、償いの方法を持っていませんでした。その私たちに対して神の側から恵みとしての唯一の救いの道が啓示されました。それが救い主イエスキリストによる完全な罪の贖いです。私たちも信仰によってイエスによる完全な罪の贖い、罪からの救いを得ていることに心から感謝しましょう。

10月31日(金) サムエル記第一6章4～6節

「もしかしたら神は、あなたがたと、あなたがたの神々、そしてあなたがたの地の上にのしかかっている、その手を軽くされるかもしれません。」(5節)

「私たちが送るべき償いのものは何ですか。」と人々が問いますと、祭司たちと占い師たちは「ペリシテ人の領主の数に合わせて、五つの金の腫物、つまり五つの金のねずみです。」と答え

ました。この償いのものは、わざわいと人々の苦しみを取り除くと同時に、冒涇した神に対する貢ぎ物の意味合いもありました。ここで「ペリシテ人の領主の数に合わせて五つ」と言われていますが、5章で実際にわざわいにあったアシュドテ、ガテ、エクロン以外にガザとアシュケロンがあります。このように、わざわいを被った地域だけではなく、ペリシテ全体が貢ぎ物をささげて、主の御前に悔い改めていかなければならなかったということです。

5節では「あなたがたの腫物の像、つまり、この地を破滅させようとしているねずみの像」と言われています。ペリシテの地を破滅させようとしていたのは主の御手でしたが、ここで人々は腫物と病原菌を運ぶねずみとを関連づけた可能性があり、腫物の像＝ねずみの像とされているのかもしれませんが、それは、「厳しい手」（7節）非常に重くのしかかっていた神の御手（11、節）を軽くする目的がありました。出エジプトの出来事は、近隣の国々に対して非常に大きなインパクトを与えたのでしょう。4章8節ではエジプトを打った災害のことが語られていて、ここでは「エジプト人とファラオが心を硬くしたように、心を硬くするのですか」と、主に対して心を硬くすることを戒めていることから分かります。

私たちの罪のゆえに、神の御手は私たちの上に常に重くのしかかっていました。それを私たちは自分でどうすることもできませんでしたが、父なる神が、愛のゆえに宥めのささげ物としての御子を遣わしてくださり、私たちが心を硬くせず、主イエス様を救い主として受け入れた時に、御怒りによって伸ばされた主の御手は取り除かれました。一方的な主の恵みによる救いを私たちは心から感謝をしたいと思わされます。

11月1日（土）サムエル記第一6章7～9節

「そして、それが行くままに、去らせなければなりません。」（8節）

ペリシテの祭司たちは、一台の新しい車とくびきを付けたことのない、乳を飲ませている雌牛を二頭用意するように言います。そして、その二頭の雌牛を車につなぎ、子牛を引き離すように言われていますが、これは、子牛のために雌牛が暴れたりするのを防ぐ目的があったと思われる。そして、主の箱を取って車に載せ、償いとして返す金の品物を鞍袋に入れ、「それが行くままに、去らせなければならない。」と言われています。くびきを付けたことのない雌牛は、彼らは人に従うことを学んだことがないので、自分たちの行きたいと思うところへと、どんどん進んで行きます。ですから、ゴードンという学者は、その動きに人間の思惑や考えが入る余地は一切ないと言いました。それと同時に、くびきを付けたことのない雌牛たちは、普通は自分の仲間たちのいる場所へと自然と戻っていくようです。しかし、その雌牛たちが、ど

仲間たちから離れて行って、その箱がその国境への道をベテシエメシュへ上って行くことは、普通であれば考えにくく、特別な力がそこに働いたと考えるべきだということです。だから、「私たちに大きなわざわいを起こしたのはあの神です。」と言えるのです。

私たちも、クリスチャンとして主のみこころに従いたいと思うでしょうし、何とかして主のみこころを知りたいと思うことでしょう。しかし、私たちは、雌牛が行くままに去らせたくはないと思ってしまいます。自分の願いや考えとは違う方向に、つまり、自分の意に反するかたちで主が自分を導こうとしていると感じるなら、自分の意に添うように軌道修正してしまうことはないでしょうか。また、それらを無視して自分の思いどおりに事を進めることはないでしょうか。そうするなら、決して私たちは主のみこころに従うことはできませんし、その道を見出すことはありません。人の思いや考えを一切除いて、服従する信仰をもって、ただひたすら主のみこころを祈り求めるなら、主は必ずご自身のみこころを明らかにし、私たちを導き、その歩みを祝福してください。